

新学習指導要領が今年度より実施され、小学校でも高学年で「外国語活動」が本格的にスタートしました。何かと話題として取り上げられることの多い小学校外国語活動ですが、本稿では第二言語獲得という見地から小学校の先生方に参考にして頂けそうなことをQ&A形式でいくつか述べさせて頂こうと思います。

## 一 英語は外国語？

外国語活動に関しては「英語を取り扱うことを原則とする」と明示されています。確かに、英語は英語圏で話されている言語という意味で「外国語」なのですが、私達にとって英語は本当に「外国語」なのでしょうか？

人間の言語について調べる場合、言語とはヒトが個々に脳に内在化させている言語能力と見なされます (Chomsky (1986))。ですので、人間の言語がヒトから切り離されて存在することはあり得ません。日本人（正確には日本語母語話者）が英語を学ぶということは、それが「外国語活動」、「英語活動」そしてまた教科としての「英語」のうちどういった名の下で行われるにせよ、個々に「第二言語（L2）」として脳に内在化させている英語の知識を発達させていくことであり、学習者の数だけ「L2英語」も存在することになります。まずはその意味で、名称は何であれ「英語」をいつまでも「外国語」扱いするのではなく、一人ひとりの英語学習者が自分の「L2英語」を大事にし、発達

リレー連載

## 教育のゆくえ

「小学校外国語活動」の開始にあたって：  
第二言語獲得の見地から



野地 美幸

上越教育大学 准教授

させていつてほしいと思います。

外国語（英語）活動の目標は「外国語を通して、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う」こととされています。このように小学生に対しても結局は「コミュニケーション能力の素地」の育成を求めている、外国語（英語）活動も「L2英語」をコミュニケーション目的で使えるようにするという大きな取り組みの中に組み込まれたことになりました。

一方、実際そのために与えられた時間は高学年で年間35時間とごく限られた時間です。標準的には1時間が45分の授業なので、実際には年間26、25時間になります。です。で、小学校に英語が導入されたからといって現実的には日本人の英語力が飛躍的に伸びるとは考え難い状況です。その意味で周囲の方には冷静な対応を期待したいと思います。また、英語教育を専門としない小学校の先生方にとって年間35時間というのはやはり心理的には負担であると思われると思います。最初のうちはまずうまく乗り切って頂きたいと思えます。そして少し慣れて余裕が出てきたら小学生と一緒に是非楽しんで頂きたいと思えます。

## 二言語(英語)はコミュニケーションの手段?

人間の言語は(おそらく一般に考えられているより)か

なり内容豊富で精密なシステムです。しかしながらコミュニケーション用にできていないわけではないので、どんな言語にも複数の解釈が可能な曖昧文というものが存在します。言葉で説明しようとするとは非効率的で「百聞は一見に如かず」ということもよくあることです。コミュニケーション目的で言語を使用するというのはそもそも大変なこと。第二言語を使用するととなると、なおさら困難となるのは言うまでもないことでしょう。ここでは基本的とも思えるかもしれませんが言語とコミュニケーションの問題を少し取り上げてみたいと思います。

一でも述べましたが言語は個々の人間に備わった能力なので、コミュニケーションを目的として言葉を交わす場合当然ながら複数の言語が関わってきます。例えば、ある動物が話題になつていいる文脈である話し手が「キリンだけが食べた」という文を発話した場合、その話し手は「キリンが食べた」という前提で「食べたのはキリンだけ」という意味を込め、「キリン以外の動物は食べなかった」という主張をしていることになります。それを聞いた聞き手もまた自らの言語を使ってその発話の音声処理し意味を割り出します。そして正しく「他の動物」も文脈から割り出して主張を理解したとしましょう。言語の仕事というのは言わばここまでです。実際の会話場面では相手の話に集中していなかつたりするのでこの段階まで到達できるかも保障の限りではありません。そして最終的に問題になるのは話し手の発話の意図です。何を食べたかにもよりますが「キリン

ンはずるいという思いをただ伝えたかった「他の動物も食べられるように何か手立てを考えてほしかった」など、具体的にどんな意図を汲み取るかも完全に聞き手に任ざられています。与えた解釈に矛盾が生じない限り、誤解だとしてもそれに気付かない可能性も十分考えられます。言語をコミュニケーションのために使用する際に、私達は言葉は通じないという前提で最善を尽くす必要があるのかもしれない。

一方、コミュニケーションの手段という観点から言語を見ると（顔の表情やジェスチャーももちろん大事ではありますが）言語の有用性は際立っており、コミュニケーションの手段として中核を担う存在と言えるかと思えます。言語を用いることにより、過去や未来のこと、遠い外国・宇宙のことについて時空を超えた話が可能になります。また、架空のことについて話を作り上げることも可能です。

また、実際に音声や文字を介した言葉のやり取りは行われなくても言語を使用したコミュニケーションというものが成立する可能性があります。よって、ミスコミュニケーションも起こってきます。独り言を言ったりすることからわかるように、私達の言語は実は「思考の道具」としても使われているのです。車を運転中に右折しようとして直進してきた車と衝突しそうになったという経験はないでしょうか？「また遠くにいるから大丈夫だ」と思っていたかもしれませんが、相手の車の運転手はこちらの車に対して「止まっているから大丈夫。早く通り過ぎよう」と思つて加速

した可能性があります。外国では何気ないしぐさが思わぬ誤解を生むこともあります。「見えないな」と思つて目を細めると、たまたま視線の先にいる英米人に「疑っている」とあるいは「怒っている」と思われる危険性があります。

結論として、言語をコミュニケーションの手段と同一視することはできないのですが、人とコミュニケーションを取る場合、言語を使用すると便利な状況に（言語なくしては伝えられない状況にも）よく出くわすこととなります。またその一方で、人間がテレパシーのようなものを使えない限り、ミスコミュニケーションを完全に回避することは不可能と言えるでしょう。

では最後に、言語とは具体的にはどんな能力なのでしょうか？それは、語と語をつなぎ合わせ、無限の数の、そして原理的には無限の長さの文を作り出すことのできる体系だった知識で、個々の文に対して音（一連の音の連続にアクセントやピッチと言った韻律情報を加えたもの）と意味を決定するものです。人間の言語は、その表現力の豊かさをゆえにコミュニケーションの手段として使用されるようになったとの考えもあります（大津 2004）。

### 三 英語の獲得はゼロから始まる？

「小学校に英語が導入された」と聞くと、それを聞いた人の中には小学生が白紙の状態に英語に臨む姿を思い浮かべる方もいるかもしれませんが、それは誤解です。第二言語

獲得研究では完全転移 (Full Transfer) 仮説というものが提唱されています (Schwartz and Sprouse (1996) 等)。

これは、母語の特性を全て抽象的な形で受け継いだものが第二言語獲得の初期状態であるとする考え方です。研究としては個々の言語特性について検証が続いている段階ですが、今のところこの仮説に合致しないものとして明らかになっているのは否定辞と定型動詞の語順に関するものくらいです。フランス語、英語、中国語といった第二言語について母語が異なる様々な学習者を対象に研究が行われ、この語順についてはエラーがほとんど無く、母語の影響も見られなかったとの報告があるのです (Yuan (2001) 等)。

母語の知識は普段全く意識されることのない知識ですが (実はそれは何かと聞かれても答えられないはずなのに誰もが「知っている」と思い込んでいる不思議なものなのですが)、この仮説が正しいとすると第二言語学習者はそれを暗黙のうちに引き継いでいることとなります。英語を学ぶ場合、特に大人になると私達は「できないこと」の方に目を向けがちですが、実は学習開始の段階からかなりの知識を身に付けていてそれを使っているのです。

例えば、私達は英語の歌や話を聞いて確かに耳慣れない音に気付くと思いますが、その一方で聞き取れた多くの音もあるはずです。小学生も高学年になるとわからないことに対して不快に感じるようになる時期かと思いますが、そういう既知の力を頼りにして、同じ英語の聞き取りでも (わかりそうな単語が入っているものを予め用意した上で)

わかった単語に注意を向ける工夫をすると「英語を聞きとれた」という達成感につなげられるかと思えます。

#### 四 教えてもいないことを言い出す

これは二で述べたことも一部関係することですが、第二言語獲得では決して珍しいことではありません。獲得が進む様々な段階で様々な現象が起こってきます。例えば、英語は動詞そしてその後目的語が来るVO語順が普通ですが、目的語が先に来るOV語順の言語を母語とする英語学習者の初期の英語の発話には something eating のような母語の語順を反映したエラーが見られるとの報告があります (Haneda (1997))。日本語も目的語が動詞より先に来る言語なので同様の現象が見られるはずですが。

また、L2英語学習者に関して (Tom gets up early everydayではなく) Tom is get up early everyday のような動詞が余分な要素として入り込んだ文を発話するとの報告があります。このようなエラーは英語を母語として獲得する場合には見られないのですが、L2英語の場合は母語が日本語、ロシア語、フランス語、中国語など様々な異なっているも観察されており (Tonin and Wexler (2002) 等)、母語が何であるかに関わりなく生ずるものと考えられています (Fleta (2003))。ただし、母語が日本語か中国語かによってエラーの頻度は異なり、日本語が母語の場合により多くのエラーが起こります。

こうした目標言語からすれば間違いとなるエラー文は教科書に書いてあるはずがなく、先生が教えるはずもありません。第二言語が発達していく際に見られる特徴であり、「習得」ではなく「獲得」と呼ぶ方が適切だとしてその理由に挙げられることもあります。第二言語獲得に関わっていく際には誰が教えてもそういうことは起こるものなので、教え方が悪かったのではないかといった悩みを抱えないためにも、あらかじめ知っておいた方がいいことの一つだと思います。

## 五 大人より子どもの方が発音が悪い？

英語の学習に関しては「大人より子どもの方が耳がいいから早く覚える」などといったことをよく耳にするかと思いますが、そうすると小学生は大人と比べて発音がいいのでしょうか？

獲得研究の中でこうした学習開始年齢による違いは臨界期説と関連して議論されてきました。第二言語獲得に関して臨界期説を唱え始めたのは Penfield and Roberts (1956) と言われます。彼らは「生物学的な時間表(biological time table)」という用語を用いて、脳生理学的観点からすると外国語学習に適した時期は模倣能力が旺盛な四歳から八歳の間であろうと述べました。しかしながら、その後の研究では、子どもの方が大人より優れていることを示唆す

る研究もあれば大人の方が子どもより優れていることを示唆する研究もあつて矛盾を示すこととなりました。現在のこの矛盾は、獲得の初期段階(数十分から数カ月(10ヶ月頃))でのパフォーマンスと最終的達成度(ultimate attainment)を区別することにより解決されています。つまり、獲得初期段階でのパフォーマンスを比べてみると、音韻的側面、統語的側面の両方に関して子供より大人(特に若い人)の方が高いパフォーマンスを示しますが、大人が優位になる期間というのは長くは続かず、すぐに逆転し、最終的達成度を比べた場合には音韻的側面と統語的側面の両方に関して大人より子供の方が高いパフォーマンスを示すことになるのです。

ではなぜ獲得初期段階では大人の方が優位かという点、大人は「教わってテストを受ける」ということに慣れていく、タスクには高次の認知スキルが要求され大人の方が有利である、といった理由が考えられています。

第二言語獲得も若ければ確かに優位と思われませんが、最初から小学生に高いパフォーマンスを期待することはできないということがわかるかと思えます。

## 六 教えても使えるようにはならない？

植物が、種を蒔くとそこから芽が出て、葉が増えて・・・と一連の成長を辿り、最初から花が咲くのを期待すること

はできないのと同様に、言語獲得にも（母語の場合も第二言語の場合も）一定の順序があると考えられています。例えば英語の疑問詞疑問文はWhat is the boy throwing?のように、疑問詞が文頭に来るという特徴と助動詞が倒置されて主語の前に来るという特徴を持っています。L2英語学習者が先に獲得するのは疑問詞の文頭への移動であると言われており、L2英語の発話には疑問詞が文頭に来ても助動詞の倒置がうまく行われていない文が見られます。日本人英語学習者（大学生）に関してもそうであることが報告されています（Sakai(2004)）。

一方、こうしたエラーに対して教示の効果はほとんど期待できません。教えたとしても、そしてまた学習者がそれを頭では理解したとしても、実際のL2英語使用の場面で正しく使用できるかは別の問題ということになります。鉄棒の逆上がりについて言葉でいろいろ説明しても逆上がりができるようにはならないのと同様にL2英語も使いながら使えるようにしていく必要があります。ですので教室では様々な英文を聞かせて（インプットを与えて理解してもらおう）活動を繰り返し粘り強く続けていく必要があります。また、実際に英語の文を発話できるようにするためには口や舌を動かして英語の音を作り出す練習も必要です。子どもは面白いと思ったら多少長い文でも一つの塊としてあまり苦にせず何度も繰り返し言おうとするので、そんな子どもの姿が見られれば大成功と言えるでしょう。

## 引用文献

- ① Chomsky, N.(1986). *Knowledge of Language: Its Nature, Origin and Use*. New York: Preager.
- ② Haznedar, B. (1997). L2 acquisition by a Turkish-speaking child: Evidence for L1 influence. In Hughes, E., Jughes, M., and Greenhill, A. (eds.), *Proceedings of the 21st Annual Boston University Conference on Language Development* (pp.245-56). Somerville, MA: Cascadilla Press.
- ③ Fleta, M.T. (2003). Is-insertion in L2 grammars of English: A step forward between developmental stages?. In Liceras, J.M., Zobl, H., and Goodluck H. (eds.), *Proceedings of the 6th Generative Approaches to Second Language Acquisition Conference* (pp.85-96). Somerville, MA: Cascadilla Press.
- ④ Ionin, T. and Wexler, K. (2002). Why is 'is' easier than '-s'? Acquisition of tense/agreement morphology by child second language learners of English. *Second Language Research* 18: 95-136.
- ⑤ 大津由紀雄.(2004). 「言語機能起源論…考えるヒント」『科学』74:820-21.
- ⑥ Penfield, W and Roberts, L. (1959). *Speech and Brain Mechanisms*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- ⑦ Sakai, H. (2004). Testing the validity of processability theory : An analysis of English utterances by Japanese university students. *ARELE* 15: 11-20.
- ⑧ Schwartz, B.D. and Sprouse, R.A. (1996). L2 cognitive states and the full transfer/full access model. *Second Language Research* 12: 40-72.
- ⑨ Yuan, B. (2001). The status of thematic verbs in the second language acquisition of Chinese. *Second Language Research* 17: 248-72.